

Echoes of Time

景色が受け継ぐ能代

15～18ページは、能代市市制20周年記念事業の一環で実施する
秋田公立美術大学と能代市の連携による特集ページです。

vol. 05

March, 2026

景色の手前

日本最大級の松林である「風の松原」。成長と衰退を繰り返してきたこの長大な松林は、1987年に愛称が定められたことで、一つの存在としてより強く共有されるようになった。最終回では、「風の松原」を手がかりに、意味や価値に回収される以前の「そこに在る」という状態そのものを問い直す。

(撮影場所：風の松原)





抽象と具象の境界に

「在る」こと、「見る」こと

「風の松原」は、能代の人であれば誰もが知っている地域資源ではないでしょうか。日本最大級の規模をもつこの松林は、江戸時代から植林が続けられ、現在では飛砂の軽減や防風・防潮といった機能を担う保安林として、沿岸部の風景をかたちづくっています。日常生活の中でその機能が強く意識されることは少ないかもしれませんが、生活を支える基盤として、確かにそこに在り続けます。

他方、「風の松原」と聞いて、どのようなイメージが思い浮かぶでしょうか。画像検索を試してみても、さまざまな「風の松原」が示され、誰もが共有する決定的な視覚像があるとは言いがたいように感じます。多くの人に知られていながら、明快なイメージを持ちづらい——「風の松

原」は、そうした捉えどころのなさを含んだ存在なのかもしれません。

16頁の「風の松原」の写真を眺めていると、その思いはいっそう強くなります。望遠レンズによる圧縮効果によって遠近感が失われた松林が、均質で平板な像として立ち上がっています。画面を注視しても一本の松を識別することは難しく、むしろ注視すればするほど、松林は緑の点群へと解体され、抽象的な存在へと変化していきます。

しかし、この抽象化は完全には成り立ちません。画面に差し込まれた電柱や防風柵といった人工物が、現実の尺度を呼び戻すからです。その結果、具象でも抽象でもない中間的な像が保たれ続けます。草薨さんは、「風の松原」を抽象化しつつ、別の像を想起させるところまでは踏み込まず、その途中に留めることを選んでいるわけです。

この留まり方が意図的なものであ

ることは、15頁の「風の松原」の写真と比較すると、よくわかります。

モノクロで表現された雪の日の松林は、大胆なクローズアップによって抽象的な像を形成し、「細胞みたい」といったさまざまな類推を誘発します。抽象化により「風の松原」が、別の何かへと見立てられやすくなっているのです。それに対して、16頁の「風の松原」は、別の像を想起させるほどの抽象性はなく、他の何ものにも回収されない「風の松原」として、画面に留まり続けています。その状態は、「風の松原」の「捉えどころのなさ」と、どこか重なるように思われます。草薨さんは、この「捉えどころのなさ」を解消しようとしたのではなく、あえてそこに視線を留めようとしたのかもしれない。それは、「風の松原」の存在意義を訴えるでも、その美しさを強調するのでもなく、そのような理解が生まれる前の、ただ「そこに在る」

という状態に向き合おうとする姿勢といえるでしょう。

何かと目的や根拠を問われ、分かりやすい意味の共有が要請される時代において、「そこに在る」ということ自体に目を向けるのは、決して容易ではありません。解釈するのでも、語るのでもなく、意味が立ち上がるその手前でただ対峙すること。その姿勢を通して生まれる被写体との新しい関係——それこそが「Echoes of Time」が目指してきた「写真による魅力の創造」であったと、今は思います。

※本企画は、今号で終了します。ご愛読ありがとうございました。

Echoes of Time

(エコーズ・オブ・タイム)

景色が受け継ぐ能代

vol.05 | March, 2026

写真 草薨 裕
執筆 井上宗則
デザイン 越後谷洋徳
編集 高橋ともみ
企画 秋田公立美術大学
制作 NPO法人アーツセンターあきた

能代市市制20周年記念事業業務委託